

エッセイ 古本屋の仕事場十三

いい加減な本こそおもしろい

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S 落丁を調べる

和本を仕入れて最初にする仕事は、落丁調べである。とくに版本は、丁付を数えながらめくっていく。その方法は本を天地さかきにして、お札を勘定するときのように扇状に広げて五枚ずつ、あるいは二枚・三枚



とめくっていく（上図）。それに合わせて丁付を五、十、十五……と追っていく。それが五、十、十六となったら十一丁以降に抜けが見つかる。これが落丁だ。
古本を仕入れた後、落丁がないかどうかを調べるのは江戸時代から小僧さんの仕事と決まっていた。数が多いと夜遅くまでかかったという。

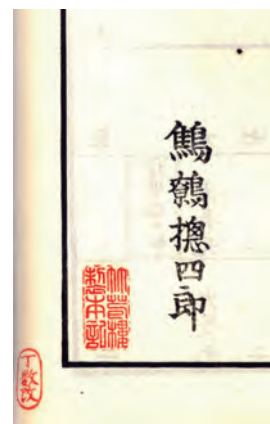
経験上まず九十九パーセン

ト落丁はないものである。しかし、逆をいうと百冊に一冊くらいは落丁が出てくることになる。二百年、三百年前のミスが発見されるのである。だからおろそかにできない。

落丁というのは製本の段階でおきる。現代の洋装本では十六頁分一折がそっくり抜けてしまう。落丁調べをすると十で割り切れない頁数なるので、すぐに発見できる。

和本の場合は一丁単位で抜けてしまうことになる。版本の製本過程では刷った後、まず丁付の順に一枚ずつ紙を揃えていく。これを「丁合をとる」という。このとき抜けてしまうのが落丁だ。また、順番の狂うのが「乱丁」である。いずれも現代でも使う出版の業界用語である。このあと表紙をつけて綴じる仕立て職人に仕事を回し、そこでも検査するだろうから落丁・乱丁は減っていく。現在見つかる落丁は、ここまできても見過ごされたものだ。だから二百年も三百年前にすり抜けたミスを現代のわれわれが責任をとるとするのは釈然としないものがあるが、これを済ませないと落ち着かないのである。

新刊が出版社にあるうちなら取り替えてもらえるが、和本はもとより絶版になったような古い本の交換は無理だ。そこで、古書の市場では落



落丁がないことを示す「丁数改」の印が擦された本

丁本は返品ないしは値引きできるルールが存在している。戦前は落丁一丁につきいくら値引きするという決まりもあったらしいが、現在は落札価格の10%ないしは15%くらい引く。顧客に売る場合もそれを承知してもらって価格を安くすることになる。

長澤規矩也先生がまだご存命だった頃、和本の落丁が見つかること、きつちり「全丁分の一」の値引きを要求された。たとえば、五十丁の本の一丁がないと、五十分の一まけるといわけだ。一万円なら二百円お返しする。誠心堂の先代は「さすがに数学者の息子さんだけある」と感心していた(正確には長沢亀之助の孫)。

落丁箇所を手書きで補写して綴じこんだ本もよくあるが、これとて欠点には違わないので事実上落丁扱いである。ただし、乱丁のほうは綴じ糸と中締め(こより)の紙捻(こより)をほどいて製本し直すことができるので、ペナルティとはならない。

§ 丁付ミスの取り繕い方

丁付に関するミスは必ずしも落丁とは限らない。一、二と順に番号をふるのがふつうだが、二があつてさらに「又二」という書きかたのときがある。二をふたつ作つてしまったか、あとから一丁追刻したときの書きかただ。「二ノ一」・「二ノ二」とするときもある。ただし「二ノ五」などという書き方は二から五までということ、三、四はないという場合に用いる。「ノ」の使い方はむしろ、この丁付の数字が抜けたときの

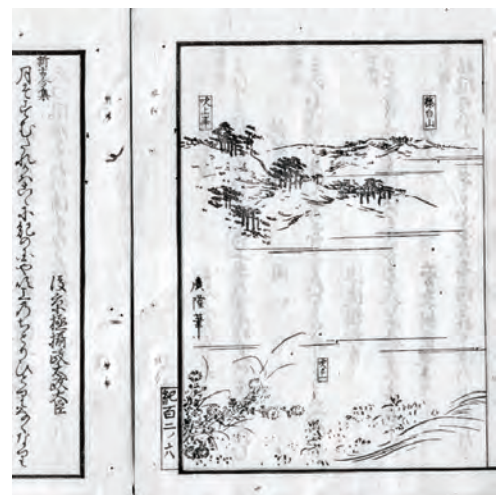
取り繕いなのである。右下図の『紀国百首』では「紀百一ノ六」となっていて四丁分数字が抜けていることを示している。

丁付が抜けているのに修正もされていない本もある。丁付は飛んだままなのに中の文章はきちんとなつながつている場合だ。

原欠なのだが、それを調べるには、他の現物と比較しないといけないので大変である。

逆に丁付が重複することもある。そういうときは、「又八」と書くのだが、下左図の『古今著聞集』

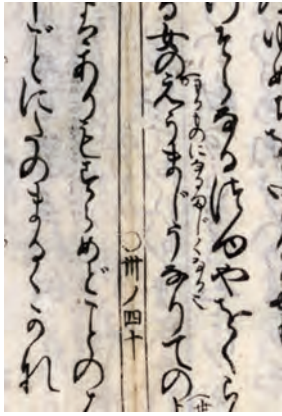
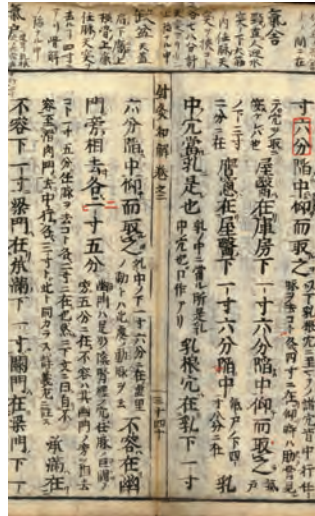
の巻十二には八が二丁あつて重複していたのに丁付は修正されていない。このへんの後始末のやりかたを覚えておかないと、むやみに落丁だと騒いでは恥をかくことになる。



S 意図的な丁付

ところが、右図の『鍼灸和解』の巻二は、「三十四十」となっている。もうひとつその左側の『伊勢物語』の版本でも「卅ノ四十」となっている。三十一から三十九が抜けているという取り繕いのように見えるが、これは単純なミスとはいきりえない。意図的な丁付である可能性があるのだ。

実はこういう本はよくあるもので、本を厚く見せるための作為である。店先で本を手にとって最終丁を見ると「五十五丁」となっていたとする。全五十五丁ある立派な本だと勘違いして買ってしまふ。しかし実は四十



五丁しかない。昔はよくお土産のお菓子に「上げ底」というのがあった。箱の底が厚くなっていて大きく見えるが、実際の中身は

お菓子はちよつとしかない、というのと同じ発想である。図書館の書誌データの中には、この最終丁の数のままを総丁数であるかのように書いている場合があるが、それは調査不十分とい

うものである。まだ騙されている。

草紙屋の出す本にはもつといい加減なものがある。そもそもどこにも丁付がない本も多いし、文章が通ずるのに丁が飛んでいたり、七、八、九ときたのに四、五、六に戻ってみたり、別の本の丁を挟んだり、あまりのずさんさに調べる気にもならない。というか、調査不能である。青本や合巻なら五丁単位でつくるのでこういう事例は少ないが、草紙屋の出す往来物や重宝記のたぐいはまったくこだわっていない。そういう本づくりなのである。そこに本屋の素顔が見えて、ここまできるとむしろ微笑^{ほほ}えましい。

ミスというなら、そつくり何行もの文章が抜けている本、刊記の住所を間違えた本、校正のいい加減な本などほかにも枚挙にいとまはない。また、インチキというなら浄瑠璃本の権利を持っていた山本九兵衛の海賊版というべき山木九兵衛版なども有名である。「重板」が本屋仲間によって厳しく詮議されるようになった江戸時代の中頃には版權問題はだいに解決されていくが、最近どこかの国の者がやっているようなことが、江戸時代は横行していた。

落丁だミスだ、作為だといちいち目くじらをたてるのでなく、そういう江戸の本づくりの実情を楽しむ余裕がほしい。旧蔵者の蔵印や書き入れて本の来歴を知るのも和本にふれる楽しみだが、本から直接二、三百年前の本屋たちのメンタリティーまで見えてくるところは、別な意味でもつとおもしろいことである。書誌学では学べない世界だ。